

郷土文学資料センター だより

第3号 2004年 5月14日

地域と大学の絆として—郷土文学資料センターの現況—

郷土文学資料センター所長・稲田秀雄

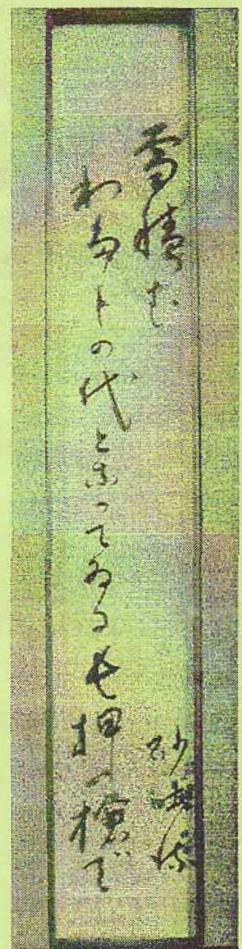
今年度(平成16年度)、熊本守雄教授から附属郷土文学資料センター所長の任を引き継ぐことになりました。そのごあいさつを兼ねて、以下に当センターの現状について若干の報告を申し上げます。

当センターは、昭和61年の発足以来、大学附属機関として、学内・学外の多くの方々の御支援のもとに、山口県にゆかりのある文学関係資料の収集に努めてまいりました。その結果、嘉村磯多文庫・渡辺砂吐流文庫(自由律俳句関係資料を含む)・上野さち子文庫(田上菊舎関係資料を含む)等の寄贈資料をはじめとして、林滝野宛与謝野鉄幹書簡、鷺流狂言関係資料等、蔵書も近年いっそう充実し、江戸後期から現代までの多様な文学資料を揃えるに至っております。

また、今年1月には故太田静一氏(元山口女子短大教授)のご遺族より多くの蔵書をご寄贈いただきました。加藤禎行講師を中心に学生有志の協力を得て、その整理も3月中にほぼ終わりました。この中には、川端康成や井伏鱒二の自筆書簡、嘉村磯多自筆葉書のような貴重な資料も含まれており、いずれ学内で展示することも考えています。

現在、センター研究員全員により、平成13年3月に刊行した『山口県文学年表』年表編(作者・作品・刊行年)を電子情報(データベース)化するための作業が進められています。ウェブサイト上での公開ができるようになれば、山口の文学(歴史・文化)に関する膨大な情報を地域のみならず、全世界に向けて提供することになりましょう。

当センターが、山口の風土に育まれた文学を媒介としつつ、地域と県立大学を結ぶ絆の一つとして、よりよく機能するよう、今後とも努力する所存です。皆様方には、今までと同様の御支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



(写真：渡辺砂吐流氏の短冊)

嘉村礒多「愛蔵の書物棚」等の寄贈

熊本守雄・センター研究員

平成16年1月14日に、山口女子短期大学元教授の太田静一先生がご所蔵であった多くの書籍類を、ご遺族の統一様より、山口県立大学附属郷土文学資料センターにご寄贈いただいた。嘉村礒多「愛蔵の書物棚」をはじめ、川端康成の書簡、嘉村礒多関係資料を中心に、郷土文学関係の多くの雑誌・書籍である。

太田静一先生が『嘉村礒多 その生涯と文学』の中で、「(チトセが) その家什一切—東京から持帰っていた礒多の蔵書なども町の古本屋にすっかり売却していたのであった。余談だが以前山口市道場門前にあった白石という古本屋の主人もその時チトセから本を沢山買った由、その際ついでに買った礒多愛用の本箱もあるというので私は十五年ほど前に千円ぐらいで頒けて貰い現に所蔵している。礒多の随筆《経机》中に書かれている。“…書物棚といつても、煙草店のバットや朝日など並べておくやうな風の、一段しかない硝子戸のついた古い箱である。それも忽ち愛蔵の品となり…”とある。その本箱なのだ。」と記していらっしゃる本箱を、今回寄贈いただいたのである。

太田静一先生は、明治43年奈良市のお生まれで、東京大学文学部支那文学科在学中は、第十一～十二次「新思潮」の同人として創作・評論に筆を執られ、昭和8年卒業後は、大学院、平凡社「大辞典」の編集委員、更には恩師塩谷温先生の許での弘道館「新字鑑」の編集の仕事に携われ、その後、旧制新居浜中学を経て、戦後、山口県立大学の前身の山口県立女子専門学校に赴任なさり、ひき続いて山口女子短期大学においては、中国文学の他に日本近代文学の授業を担当された。4年制の山口女子大学に昇格する直前の昭和50年3月に定年退職なさり、その後8年ばかり宇部短期大学国文科で教鞭を執られた。

■資料紹介■ 新収の 太田静一宛 川端康成書簡 について

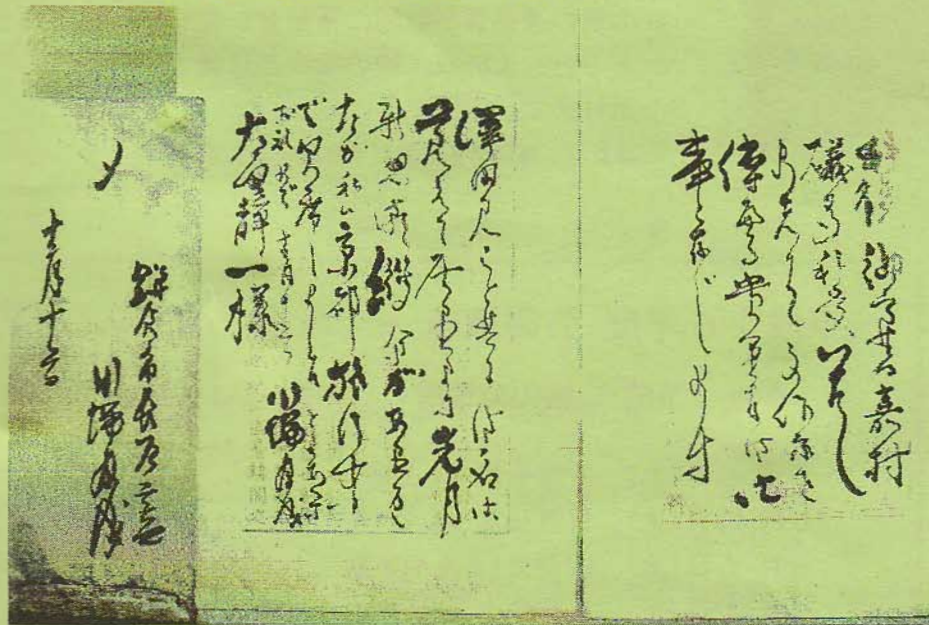
加藤禎行・センター研究員

今回、太田静一氏遺族より、県立大学附属郷土文学資料センターに寄贈された、太田静一宛川端康成書簡の本文は以下の通り。「拝復御高著嘉村／礒多拝受いたし／ましたこの作家を／伝へる貴重な御仕／事と存じます／澤田君らと共に御名は／覚えて居りまず先月／新思潮 □□ がありまし／たが私ハ京都旅行中／で欠席しましたとりあへず／お礼まで 十二月十二日 川端康成／太田静一様」。

封筒表には「山口市宮野 山口女子短大内 太田静一様」、封筒裏には「鎌倉市長谷二六四 川端康成 十二月十二日」と記載がある。消印は昭和32年12月12日付け。

山口女子短大の教員となる以前、文学者志望の太田静一は、第十一次『新思潮』（1932〈昭和7〉年5月創刊）の同人として活発な創作活動を行っていた（ほかに杉森久英・壇一雄・高田瑞穂らが同人）。川端康成もまた、第六次『新思潮』（1923〈大正12〉年7月創刊）の同人であり、おなじ東京帝国大学文科の同窓として、川端康成は太田静一から見て先輩にあたっている。また川端康成は、嘉村礒多と同じく昭和初年代の新興芸術派と呼ばれた文学グループに属した小説家であり、そうした機縁から、嘉村礒多研究

者となった太田静一は、自著『嘉村礒多 人と作品』（弥生書房、1957〈昭和32〉年11月刊行）の上梓にあたって、川端康成に献本したものである。川端の「この作家を伝える貴重な御仕事」という文言のなかには、同時代人としての嘉村礒多を思い起こす川端の心情を窺うことができるだろう。なお本文中の「新思潮□□」という箇所の一文字目は「縦」、二文字目は「令」「分」「介」とも見えるが、文意が不明瞭となるため空白で翻字を行った。何か新思潮に纏わる会合が開催されていたか。文中の「澤田君」とともに、今後の継続調査が必要となる箇所である。



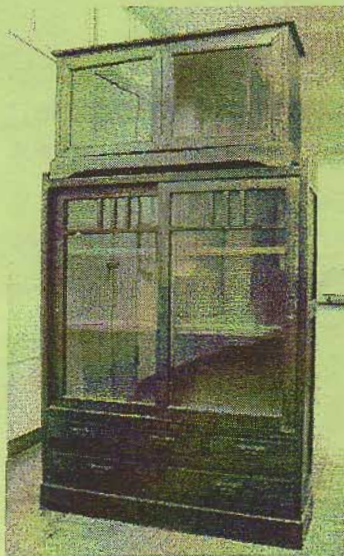
太田先生と礒多

福田百合子・中原中也記念館館長・センター運営協議会委員

終戦の翌年、太田先生は四国から山口女専に着任されました。その前には東京で塩谷温博士の下『新字鑑』の編集に従事されたとのこと、国語科一年生の私たちにとっては、まぶしいような「坊っちゃん」先生の出現でした。最初は『諸子文粹』や『古文真宝』など漢文の授業を受けました。後に近代文学演習が始まり、郷土文学の題目で嘉村礒多や中原中也が取り上げられるようになったのです。

先生は東大の学生時代、「新思潮」発行にも関わって、作家田宮虎彦や評論家杉浦民平、編集者から小説に転じた杉森久英など、当時現役で活躍中の友人も多く、文学に精通されていました。

嘉村礒多については、特にその風土と人生、家族や宗教の面から新しい見解を次々と発表され、目を見張る思いに捉えられたことです。参考文献やすべての書物が未だ手に入り難い時代で、研究室には色々な古本屋の主人がよく出入りしていました。赤ら顔の主人もその中の一員で、太ったその人が嘉村家からの掘り出し物があると情報を提供した日のことをよく覚えています。私は卒業して助手になっていましたから、昭和20年代中頃か、後半でしょうか。書籍



は研究室で購入しましたが、机や本棚もというのです。

先生と一緒に道場門前（元、映画館の手前あたり）の古本屋へ見に行きました。がっしりとした本箱と、その上に本立てがあつて、なかなか風情があります。

先生は自宅に引きとることにされました。店主自ら運び込み、玄関の次の間に据え、一同何となく満足しました。現在、郷土文学資料センターに（太田先生とご遺族のご厚志から）寄贈されている、あの本箱と本立てです。

あの後すぐ古本屋は廃業、主人も早くに亡くなり、嘉村家のその他の遺品類が数回に亘りセンターに寄贈されるという経緯を考えると、人の縁・物の縁の不思議さ、有り難さに感慨一入の物があります。

（写真左：嘉村磯多愛蔵の「本箱・本立て」）

平成16年度 公開講座 — ふるさと 山口の文学

会場： 下関市 勝山公民館 時間： 13:30～15:00

5月22日(土)	宇野千代の世界	……………	福田百合子
5月29日(土)	鷺流狂言の世界	……………	稲田秀雄
6月5日(土)	山頭火よもやま話	……………	和田健
6月12日(土)	上田堂山と『延齡松詩歌集』の世界	……………	野口義廣
6月19日(土)	「詩」は「志」なり	……………	清永只夫
6月26日(土)	防長の歌枕	……………	熊本守雄

資料 展示

“動物”名等に因む 小説・詩歌・句集類

センター研究員・野口義廣

今回の小展示は、今年の干支【猿】に因み、動物（鳥／虫／魚等を含む）を書名に冠するもの40点を広く取り上げました。“猿”に因むものは思いの外少なく、大中祥生氏の句集「群猿」わずかに1点でした。【小説9 詩(画)集3 歌集等6 句集16 川柳集1 随筆・その他5】

編集後記 ■熊本教授にかわってこの4月から稲田教授がセンター所長に就任、1面にその就任の挨拶を掲げた。 ■故太田静一元山口女子短大教授遺愛の品がご遺族からセンターに寄贈されたのを機に熊本・加藤の両教員から紹介・解説を、福田本学名誉教授から本箱についての思い出の記を頂いた。 ■4面下半に公開講座、およびC館1階廊下の資料展示のご案内を掲載した。 ■センター開設から早18年。引き続き皆様方にはご支援を賜りますようお願い申し上げます。(T)

◆編集発行：山口県立大学附属郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜島3-2-1）

TEL. (083)928-0211 FAX. (083)928-2251

◆発行日：2004（平成16）年5月14日